

遊びから学びへ —第4回ワンデイキャンプ活動報告—

渡辺啓太（博士課程3期生）・森澤小百合（修士課程6期生）・鐘珮楨（同）・相馬森佳奈（同7期生）・荻野裕子（同）・藪本容子（同）・山田初（同）・渡辺千奈津（同8期生）

0. はじめに

早稲田子ども日本語クラブ（わにっ子クラブ）は2003年の2月から新宿区内の小中学校で実質的な活動を開始した。

小中学校での日本語の取り出し指導は、日本語力などが原因で在籍学級の授業で埋没しがちなJSL児童生徒が日本語を集中的に学習したり、教科学習の課題に自分のペースで取り組んだりする場として、子どもたちの学校生活を支援することを目的としている。また、大学院生にとって、学校でのJSL児童生徒に対する日本語支援活動は、年少者への日本語教育の実践経験をつむ場、JSL児童生徒を取り巻く環境の一端に触れることができる場である。こうした場で各個別の実践と研究を積み重ねることがわにっ子クラブの活動の一方の柱である。

わにっ子クラブの活動におけるもう一方の柱が、本稿で述べる「わにっ子ワンデイキャンプ」の実施である。これまでにわにっ子クラブでは、2003年夏の第1回を皮切りに、2003年冬、2004年夏、そして本稿で取り上げる2004年冬と4回のワンデイキャンプを行ってきた。試行錯誤を重ねながらもここまで順調に回を重ねることができたのは、ワンデイキャンプの趣旨に賛同し、第1回から「後援」して下さった新宿区教育委員会、同じく第1回から本プロジェクトに「公認」を与えて下さった早稲田大学平山郁夫記念ボランティア・センターの有形無形の支援、協力と、各回に参加して下さったボランティアの方々の献身的な支えがあればこそである。本稿をはじめのあたり、まずは関係各位に感謝の意を申し述べさせていただきたい。

1. 第4回わにっ子ワンデイキャンプまでの経緯

1-1. ワンデイキャンプの趣旨

多くの子どもたちを集めて行うワンデイキャンプは、子ども同士の「語りあい」「学びあい」の場となることを第一に目指している。その「語りあい」「学びあい」を引き出すためには、子どもたちが興味を示し、積極的かつ協力的に取り組むことのできる活動を企画

する必要がある。また、ワンデイキャンプでは、そうした「語りあい」「学びあい」が日本語力に関わりなく全ての子どもの中で起こることを理想としている。従って、ワンデイキャンプではJSL児童生徒だけでなく、日本語母語話者の児童生徒のためのものでもある。

この姿勢は第1回のワンデイキャンプから現在まで変わらずに続いている。言い換えればこれまでワンデイキャンプはこのねらいを形にするために試行錯誤を繰り返してきた。以下では、第4回のワンデイキャンプについて述べる前段階として、第1回から第3回までのワンデイキャンプの概要とそれぞれの反省点を簡略に述べる。

1-2. 第1回わにっ子ワンデイキャンプ(2003年8月3日)

第1回ワンデイキャンプでは、アイスブレイキングを兼ねた全体でのゲームを大隈庭園で行った後、幼稚園児、小学校低学年、小学校高学年の3グループに分かれて室内での活動を行った。学年別のグループではそれぞれにゲームや工作を行い、自分の作ったものをグループ内で発表した。

第1回を終えて、あらかじめ設計されたゲームよりも、子どもたちの持つ発想や表現を活かす活動のほうが子どもの「語り」を引き出すことができるということが振り返りとしてあげられた。このことから、以後のワンデイキャンプでは参加した子どもたちがそれぞれ何かを表現する場が用意されている。また、第1回では発表の内容を全体で共有することができなかったことの反省を踏まえて、第2回以降では、グループ別の活動の後に全体での共有の場を設けている。

1-3. 第2回わにっ子ワンデイキャンプ「冬のおたのしみ会」(2003年12月23日)

第2回ワンデイキャンプでは、グループの分け方を学年縦割りに変えて「お菓子作り」「劇」「手品」「工作」という4つのグループを作った。そして、前半は各グループ作業、後半は全体会として、前半での活動の成果を全体の前で発表した。

第2回の振り返りでは、ワンデイキャンプ全体を貫くコンセプトを定めて、それに沿った活動を行うべきではないかとの反省が得られた。

1-4. 第3回わにっ子ワンデイキャンプ(2004年8月29日)

第3回ワンデイキャンプでは、第2回の反省を踏まえ、「視点を変える」ことをコンセプトとして掲げた。これは、非日常的な世界を自分たちで創造することで、多面的な見方を体験し、「違うこと」を肯定的に捉えることを意図したものであった。

前回と同じく学年縦割りで「夢の国」「深海の国」「巨人・小人の国」「さかさの国」の4グループを作り、それぞれ自分たちの「国」を作りあげた。そして、最後は「国めぐりツアー」として他の国を見て回った。

第3回では、次回に向けて、より「ことば」に焦点を当てた活動をすることが、わにっ

子クラブとしての活動である以上必要ではないか、との反省が出された。また、できればその場限りの活動として終わるのではなく、何か形になるものを持って帰ることができれば、参加した子どもたちが帰宅してからも「語る」機会を提供できるのではないかと、この提案がなされた。

以上が第1回から第3回までのわにっ子ワンデイキャンプの概要である。以下の章では、第4回のわにっ子ワンデイキャンプについて述べる。

2. 第4回わにっ子ワンデイキャンプについて

本章では、第4回の活動について、当日の活動とボランティア研修の概要を述べる。

2-1. 活動概要

第4回わにっ子ワンデイキャンプでは、本活動を言語に焦点をあてた活動としていくためのさまざまな試みを行った。第3回では「視点をかえる」ことをコンセプトとして活動を行っているが、第4回はこのコンセプトを継続し、さらに言語に焦点をあてることを目的とした。冬のワンデイキャンプは夏とは異なり、活動時間が午後の3時間だけである。短い時間で、言語に焦点をあてた「視点をかえる」活動について検討を重ねた。その結果、読み聞かせと話のつづき作りをとりあげることとした。本節では、当日の流れに沿ってアイスブレイキング、読み聞かせ、話のつづき作り、ボランティアとの対話について説明する。

(1) アイスブレイキング「じゃんけん列車」、チョコレートデコレーション

本活動も4回目となり、何度も参加する子どもが増えてきた。しかし多くが初対面で、さらに一日だけの活動であるため、はじめにアイスブレイキングを行っている。アイスブレイキング自体は毎回行っているが、今回は「歌詞を読む」という活動を取り入れた。「じゃんけん列車」は、ボランティアスタッフと、子どもたちが一緒に歌いながらじゃんけんをするアクティビティである。先に全員で歌詞カードを見ながら歌の練習を行った。中には日本語の歌詞が読めない子どもがいることも予想できるため、学校でもよく取り上げられる歌を採用した。

チョコレートデコレーションは、グループ毎に分かれ、主に、ボランティアスタッフと子どもたちの関係づくりを目的とした。子ども一人あたり2~3本の菓子パンに、デコレーション用のペンや、カラースプレーなどで飾り付けた。これは後にグループ毎の活動中に食べるようにした。

(2) 読み聞かせ

言語に焦点をあてたメインの活動が、読み聞かせである。4つのグループに分かれ、それぞれのグループで読み聞かせを行った。子どもは1グループに7~8名、ボランティアもほぼ同数である。読み聞かせのスタイルはグループ毎で決めた。使用した本は、山下明

夫作・いわむらかずお絵『ねずみのかいすいよく』、『ねずみのいもほり』、『ねずみのでんしゃ』、『ねずみのさかなつり』（ひさかたチャイルド）の4冊である。

絵本の選定では、①話のつづきを考える際に楽しそうなもの、②ストーリーが理解しやすい絵であること、③文字が比較的少ないことを条件にした。日本語母語話者の子どもにとっては①が重要で、JSL 児童にとっては②、③が重要な点考えた。採用した4冊は文字が少なく、登場人物が多い。そのため子どもたちの想像力を刺激できると考えた。

絵本は大きく見やすいものにするために、全てカラーコピーをし、大型本を作成した。

(3) の話のつづき作りのために、子どもたちには等倍の白黒コピーをし、絵本ごとに色画用紙で表紙をつけたものを渡せるよう、全員分用意をした。これはつづきを考える活動のためであると同時に、子どもたちが持ち帰ることのできる作品とするためである。

読み聞かせでは、最後まで読まず途中で読み終えて、続きの話を作る活動へ結びつけた。そのため、子どもたちが手にしている白黒コピー本は、途中で話がきれて白紙のページが入っている。読み聞かせの意義については、次章で詳しく述べる。

(3) 話のつづき作り

「視点をかえる」活動のメインが、この話のつづき作りである。大型本で読み聞かせを途中までうけた子どもたちは、それぞれの白黒コピー本につづきを作る活動へとうつる。この際、子ども一人につき、ボランティアが1~2名つき、ボランティアとの対話をしながら、作成するというかたちをとった。文字を書けない子どもでも、ボランティアと対話しながら自分の想像したことを表現できるようにするためである。鉛筆、色鉛筆、折り紙、絵本のコピーなどを使用した。上記の4冊が、「これからどうなるのだろう？」と思わせる場面で読み聞かせを終えるようにし、子どもたちが好きな視点で想像できる状況にした。例えば、『ねずみのでんしゃ』では、ねずみたちが蛇に出会った場面、『ねずみのかいすいよく』では、父ねずみが昼寝をしていた離れ小島が、海に流されてしまった場面である。

40分ほど創作活動をした後、グループ毎にミニ発表会を行った。ここで、同じグループの子どもの作品を見合うことで、たくさん視点があることに気づかせるようにした。また、人前で発表するという活動をすることで、子どもたちの話す機会を作った。

また、最後に8階会議室において、作品を展示し、他のグループの作品を見合う時間を設定した。

(4) ボランティアとの対話

今回は、ボランティアの参加人数と、子どもの参加人数がほぼ同数ということもあり、以上の3つの活動では、一対一でボランティアと子どもが接することが多かった。そこで、子ども同士の学びあいよりも、一人の相手とじっくり接しながら作品を仕上げるができるよう、ボランティアに接してもらうことにした。その為、事前のボランティア研修では、積極的に子どもと関わることを要請している。ボランティア研修については次項で詳しく述べる。

* 参考 第4回わにっ子ワンデイキャンプ時程

日時：2004年12月23日(木・祝) 13時～16時

場所：早稲田大学西早稲田キャンパス 22号館 8階会議室 (全体活動)

7階の4教室 (グループ活動)

12:45	受付開始
13:00～13:30	全体活動《アイスブレイキング》
13:30～15:10	グループ活動
15:10～15:40	全体活動《他のグループの作品を鑑賞》
15:40～15:45	帰りの準備
15:45～16:00	移動・解散

2-2. ボランティア研修

(1) これまでのボランティア研修

本節ではボランティア研修について述べる。ボランティア研修は、大学院生だけでなくボランティア一人一人が当日の流れや自分の役割を把握し、当日スムーズに運営を行うことができるようにすることである。第1回、第2回ワンデイキャンプでは、ボランティア研修はキャンプ前日の1回のみ行い、そこで当日の流れの確認や役割分担を行った。しかしボランティアから「もっと準備段階から携わりたい」という意見をいただいたことや、毎回たくさん子どもたちが参加してくれているため「もっとボランティアにも積極的に子どもたちとのかかわりを持ってもらいたい」という大学院生の希望などから、第3回ワンデイキャンプからはボランティア研修を2回に分けて行うことにした。

第3回ワンデイキャンプでは当日の約1ヶ月前に1回目のボランティア研修を行い、当日アイスブレイキングで行う予定のゲームを実際にボランティアとやってみたり、グループに分かれて4つの国の部屋を具体的にどう作りあげていくかなどの話し合いを行った。そしてキャンプ前日に2回目の研修を行って最終確認や部屋の飾りつけなどを行った。1ヶ月前に研修を行ったのは、「ボランティアとともに作り上げてきたい」という意見からで、その点ではボランティアからも好評であった。しかし1ヶ月という長い時間があいてしまうことで、研修だけ参加したものの当日こられなくなってしまったボランティアも多かった点が反省点として残った。

(2) 今回のボランティア研修

第4回ワンデイキャンプでは、キャンプの1週間前に1回目のボランティア研修を行った。このときには当日の流れなどを確認したあとで、子どもたちに配る絵本作りをボランティアとともにいった。またグループに分かれて、誰が読み聞かせを行うのかを決めたり、一度全員で絵本を読みあって絵本の内容をグループ全員が把握しているようにした。さら

に読み聞かせの担当になった人は家で読み聞かせの練習をしてもらうために絵本を貸し出した。2 回目のボランティア研修は、ワンデイキャンプが午後からということもあって、当日の午前中に行った。ここでは当日の流れの簡単な確認をした後、ボランティアの役割分担をして役割ごとのミーティングを行ったり、グループごとにどういう形で読み聞かせを行うのかなどの確認をしていった。前回 1 回目のボランティア研修の時期が早すぎたという反省点を生かして 1 週間前に研修をし、全員で絵本を作る活動を行ったためボランティア同士の交流が深まり、当日役割分担をした際にもスムーズにお互いの名前と顔を把握して動くことができていた。しかし 1 回目の研修にこられなかったボランティアに当日の流れをメールで送付しておいたものの、当日の午前中という限られた時間で最終確認を行ったため流れがきちんと把握されていなかったということがあった。

全体として、ボランティア研修を 2 回行うことはボランティアからも「ちょうどいい」「準備にも携わることができて満足している」など評価されており、ボランティアの意識が非常に高いことがうかがえる。また、当日大学院生は全体を把握して運営をしていくので、ボランティア一人一人がグループのことや全体の流れをしっかりと把握してもらえることで全体を見回して動きやすくなり、非常に有効であると考えている。ただし、2 回参加を義務付けることで、当日参加したくてもボランティア研修に参加できないためキャンプへの参加を断念したり、社会人の参加者にとってはボランティア研修が負担になっているという問題点もある。

ボランティア研修はワンデイキャンプを行ううえで欠かせないものである。そのためにもボランティアになるべく負担をかけないように、効率よく行うことが大切であると考えられる。1 回から 2 回に増やしたことは概ね評価されているが、今後どのような形態で、どのようにボランティア研修を行うかという点は、ワンデイキャンプの中でのボランティアの役割とともに今後さらに検討していかねばならないと考える。

3. 読み聞かせの意義

第一言語習得における絵本研究は発達心理学・教育心理学・図書館情報学などの学術分野で研究が盛んである。しかし、日本語教育の分野における第二言語習得としての絵本を使用した研究は、主に国府田（2004）が絵本教材の有効性について示したものに留まり、今後の研究がまたれるのが現状である。ここでは、絵本教材を利用した「読み聞かせ」の有効性についての先行研究を示し、わにっ子ワンデイキャンプのメインの活動として絵本の「読み聞かせ」の実践を行うことにした根拠を示す。

3-1. 第一言語習得における読み聞かせの意義

子ども達は、絵本が好きである。自分の遊びに夢中になっている児童でも、読み聞かせ

を始めると、近づいてきて絵本の世界に引き込まれていく。「絵本には、子どもの気持ちを引きつける不思議な力がある」というのが、わにっ子の活動を企画してきた筆者らの見解である。

松居(1973)では、「絵本は、絵が物語を語りかける」とした上で、絵本のさし絵の役割について、単なる文の説明や補助的なものではなく、さし絵それ自体が、絵本の内容やテーマ、ディテールを語りかけるものであると述べている。そして、こうした絵本は、字の読めない幼児が独りで絵本を読むことができ、楽しむことができると述べている。つまり、既に文字を十分に習得している子ども達のみならず、まだ「読む力」が十分に身につけていない子ども達に関しても、絵による視覚的補助により十分活動そのものに入り、楽しむことができる教材と言える。

また、Krashen(1993)では、「読み聞かせ」は、読み書き能力(リテラシー)の発達において、あきらかに多面的な効果をあげていることを言及し、数ヶ月にわたって読み聞かせを受けた子ども達を研究すると、読解力やつづり字力において、すぐれた成績を上げていると述べた。

さらに、秋田(1998)では、自分が本から感じ取ったことを、同じ経験をした友人や教師に、家族と語り合う面白さや、本を介して違った視点を持った他者との交流に面白さがあるとし、読み聞かせの後、内容や感想について話し合う活動は、言語能力の伸長のみならず、活動そのものに面白さがあると述べ、読み聞かせから広がる可能性についても言及している。このような、先行研究からも分かる通り、絵本教材を利用した学習活動には、多様な活動が期待できることが分かる。

3-2. 第二言語習得における読み聞かせの意義

第二言語習得における研究では、池上(2002)が、学齢期の子ども達の読解力は、語彙の豊かさと深く関連していること、そして学年が上がるに従い、教科学習に読書を通じて獲得されるような抽象的な語彙が求められること、読解力はいろいろなものをたくさん読むことで伸びることを述べた上で、しかしながら、日本語を第二言語として学ぶ子ども達は、読むための「基礎体力」が十分でないため、「読むことで語彙が増え読む力もつくのに、語彙や読む力が不足しているから読めない」という矛盾の壁に行く手を阻まれてしまうのだと論じている。日常生活の中で、自律して読書をすることができるJSL児童を育てることが、言語能力の育成には重要であり、そのためには、本が楽しいものであると感じる体験を積み重ねていくことが重要である。

わにっ子ワンデイキャンプでは、こうした読書につなげる第一歩として絵本教材を活用し、絵本の楽しさを十分に体験してほしいという願いがこめられ絵本の「読み聞かせ」を実践した。

絵本教材の有効性については国府田(2004)が、絵本のもつ特性の中から、コミュニケ

ーション性と柔軟性を取り上げて詳しく述べている。コミュニケーション性は、学習支援方法に適用しうると述べ、人間と人間を結びつける性質を示すものだとしている。柔軟性は、絵本には、守らなければならない約束事がないこと、形式・内容を自由に選択・想像することのできる書物であることから、JSL 教育を必要とする児童に対しても、その多様な絵本から個々の児童に合った絵本を見つけることが可能であり、JSL 教育を必要とする児童の多様なニーズに対応しうる可能性があることを示した。また、絵や写真による視覚表現によって「現実世界から文字世界」「具体性から抽象性」へと橋渡しをする特性があり、日常世界から少しでも言葉で作られた世界へと入り込む機会を、JSL 教育を必要とする児童に与えることのできる有効なものであるとした。

次に、絵本の「読み聞かせ」を行った後の活動についても言及したい。国府田（2004）では、JSL 児童に行った絵本教材を活用した授業実践で、その後の活動として、「ノート活動」と「対話学習」の表現活動に繋がる有効な教材だとしている。Cummins&Swain（1986）で、「生活言語」と「学習言語」の習得において言語発達が異なるとの指摘がある通り、「学習言語」の習得には時間がかかる。ここでの、「ノート活動」と「対話活動」では、こうした学習言語を育成する上で重要な役割を果たしているといえる。絵本を介して行われる対話は、問題解決や考えるための対話であり、また考えるプロセスとなる対話である。国府田（2004）では、このような対話を「学習対話」とし、日本語母語話者の児童に関しては、普段の生活の中で「学習対話」は頻繁に行われるが、JSL 教育を必要とする児童にとっては、その機会が少ないのではないかとしている。

以上のような先行研究の知見を踏まえて、本活動では、絵本教材の特性を生かし、「読み聞かせ」による活動そのものの有効性に注目することのみならず、その後の多様な活動も視野に入れ、わにっ子ワンデイキャンプの活動を考えた。また、将来的に多様な表現活動と読書へつなげる第一歩としてのきっかけ作りになることを目指したものであった。

4. 活動の様子

本章では、4 教室に分かれ活動したなかの 1 教室（『ねずみのかいすいよく』）について、活動の様子を報告する。

使用絵本 : 『ねずみのかいすいよく』

あらすじ : 7 人兄弟のねずみの家族。ある夏の日に家族みんなで海水浴に行くことになった。きれいな入り江を見つけ、さあみんなで海遊び。家族みんなでひとしきり遊んで、おにぎりを食べて…ちょっとお昼寝することに。お父さんは入り江の上で、他のみんなは浜辺の parasol の日陰で。ところが、どうしよう！お昼寝の間に満ち潮になり、お父さんが離れ小島に取り残され

ることになったのだ。泳げないお父さん、さあどうやって助けよう？

子ども : 7人 (JSL児童3人・日本語母語話者4人)

大学院生 : 3人

ボランティア : 7人

活動時間 : 全100分

4-1. 読み聞かせ

大学院生に促されるまま、子どもたちは「何をするんだろう？」という表情で静かに教室に集まった。椅子の上に大型本が置いてあるのを見つけ、早速子どもたちが中を見ようとす。かわいいイラストの描いてある絵本にはどの子も惹かれるようである。それを静止しつつ、絵本の読み聞かせが始まった。落ち着いて絵本の近くに座れない子どももいたが、みんな静かに読み聞かせに聞き入る。普段から学校でも行われているためか、絵本の読み聞かせを「聞く」という活動に何の違和感もなく入ることができた。子どもはそれぞれ日本語力に差があるため、途中絵本のストーリーが理解できているか、ボランティアが適宜話しかけ、言い換えや説明をし、支援を行った。これは、今回ボランティアの数が多く、子ども一人にボランティアが一人付くことができたためであるが、これが絵本のストーリーをみなが理解し次の活動へつなげられた大きな要因であるだろう。一部、話の途中で「その続き知ってる！」と大きな声で叫ぶ子どももいたが、近くにいたボランティアがなだめスムーズに活動することができた。

4-2. 続きを考えよう

絵本は話の途中で読み聞かせを終了させた。これは、話の続きを考えることで子どもたちのコミュニケーションや発話、想像力を活性化させるためである。途中で読み終え、「さあ続きはどうなるかな？」と、発話を促したがなかなか発言が進まない。子どもが話を理解していなかったためというよりも、みんなの前で発言することを躊躇していたためであろうと予測できた。毎日通う学校とは異なり、当日初めて顔を合わせたメンバーであったため、緊張したのであろう。しかし、各子どもについてのボランティアの促しにより、それぞれがみんなの前で話の続きを発表することができた。子ども一人ひとりにボランティアが付くことで、発話を促す環境づくりもうまくいくことができたのである。

4-3. 絵本の続きを作ろう

「さあ、みんなはどうやってお父さんを助けるのかな？絵本の続きを作ってみよう」の掛け声で始まった絵本作り。嫌がることもなく、どの子どももすぐに絵本の空いたページを開いた。学習的な要素を含んでいる活動とはいえ、絵本であるとどの子も活動に入っていくやすい。絵本を利用した活動の有効性を改めて感じる事ができた。各子どもについ

たボランティアが「どうやって助けるの？泳いで？とんで？何をつかって？誰が？」と、適宜話の流れを促すことで、子どもたちは次々と続きの話を考えていく。なかなか考えがまとまらない子どももいたが、ボランティアの上手な支援により「あ、そうか」などといながら、より深く考えたストーリーを思いついていった点が興味深い。ボランティアのうまい支援やほめ方により、どんどん子どもの発想が膨らんでいく様子が見て取れた。イラストの次は、文（文字）を書くのであるが、やはりどの子どもにも共通なようでJSL児童になればなるほど、文字をなかなか書こうとしない。ワンデイキャンプでは書かせることは強制しないが、できるだけ自然に「書く」よう、「あれ？字がちょっとでもない絵本にならないよ…。持って帰ってお母さんお父さんに読んでもらわなきゃ」等話しかけた。また、日本語力が非常に限られているJSL児童には、第一言語でも書いてよい旨を伝えた。

4-4. 僕・私の作った絵本

絵本の続きが一通り終わったところで、子ども一人ひとりにみなの前で自分が考えた続きのストーリーを発表してもらった。「僕が一番先！」と積極的に話し始める子や「絶対嫌だ」と部屋の隅へ逃げていってしまう子どもなど、それぞれの性格がよく表れていた。結局、最後まで嫌がる子をみなの前で発表してもらうまで促すことはできなかった。この点に関して、どのように促し、やる気を誘引させるかについては課題である。ただ、自分が作ったものを披露するという活動自体は、絵本の読み聞かせ・絵本の続き作り・絵を描く文を書く・発表する、という一連の活動をまとめる意味でも多くの子どもに満足感を与えられたと考えている。

4-5. まとめ

全体を通して、ボランティアによる子どもへの支援（対話等）がいかに関心の中心となっていたかに気づかされる。子どもがどう言われたらやる気を出すか、どう接したら仲良くなれるか、どう褒めたら喜ぶか等、ボランティアが「子どもの立場」になって考え支援した。今回のワンデイキャンプのような短時間の活動では、これらの支援があったからこそ子どもの発想や行動を活性化させることが出来たのである。出来上がった絵本を嬉しそうに眺める子どもたちを見ると、短時間でさまざまな面の日本語（聞く・話す・読む・書く）に接し、自分の考えをまとめ、ひとつの作品を作る、といった活動により、子どもたちは多くの満足感を得ることができたと予測できる。多くの面で彼らの日本語を活性化できたのではないだろうか。

5. 活動のまとめ

5-1. 活動を振り返って

今回のワンデイキャンプでは、「視点をかえる」というコンセプトのもとに、言語に焦点を当てることを目指して活動を行った。物語の続きを書くことにしたのは、ひとりひとりの発想によって、さまざまなストーリーができあがるということを気付かせたかったためである。本活動では、子どもたち豊かな発想によって、個性あふれる絵本ができあがった。そして、作った絵本を見せ合うことで、「こんなストーリーも作れるのか!」と新たな視点を共有することもできた。第3回、第4回と2回に渡って「視点をかえる」というコンセプトで活動を行ってきたが、本ワンデイキャンプにおいて一定の成果があげられた。また、言語に焦点を当てた活動を目指したため、子どもたちひとりひとりへのきめこまやかなサポートが必要となったが、ボランティアの協力でどの子どもも自分のペースで活動することができた。今回参加してくださったボランティアの皆様々に記して感謝の意を申し上げる。

次に、本活動終了後のボランティアへのアンケートをもとにして、本活動の成果と課題を考えていく。

5-2. ボランティアからのコメント

(1) 絵本の読み聞かせ活動 (2) 子どもたちとどのように関わったか (3) キャンプ全体についての感想 の3項目を中心に、ボランティアからのコメントを紹介する。

(1) 絵本の読み聞かせ活動

- ・ 子どもそれぞれ個性があっっておもしろかった。日本語を母語としない子どもそれほど目立つことなく、日本語を話していたと思う。
- ・ 絵本の続きは、私には想像できないような続きを子どもが考え出していて、本当にすごいと思いました。
- ・ 絵本の続きを書く活動は、子どものことばと創造力の発達を促していると感じました。
- ・ 最初は、こんな短時間で絵本が作れるのかと不安を感じたが、作業に取り掛かると、すぐに絵を書き始めたのが、すごくびっくりした。子どもの発想力はすごいなと思った。
- ・ もう少し、年齢に配慮があるとよかったのではと思いました。
- ・ たくさんのボランティアの参加により、子どもひとりひとりが大人の支えを受けながら、楽しんで絵本作りをしていたと思います。また、展示会で見せ合いをするのもとてもよい試みだったと思います。
- ・ 個人差（能力など）が大きく開いてしまい、いまいち乗り切れていない子どもも数人おり、もう少しうまく手助けできればよかったと思う。

(2) 子どもたちとどのように関わったか

- ・ 子どもが作ったものに対して、たずねたり、かわいいねとか言ったりして、自分

からどんどん話しかけるようにしました。

- ・ ひとりになっている子や何をしたいかわからない子などに話しかけ、子どものしたいことをサポートした。
- ・ アイスブレイキング前、集まっている子の中で緊張している子に話しかけに行った。
- ・ 班活動の中においては、ひとりひとりの子ども全員と接することができず、少々偏ってしまった気がします。ただ、裏を返せば、少数の子どもと1対1で話せる時間が取れて、最終的に子どもの方からも打ち解けてもらえてうれしかったです。
- ・ 最初は子どもたちとどのように接してよいのか分からず、緊張していましたが、時間がたつにつれ慣れて話せました。
- ・ 子どもたちの話に耳を傾け、なるべく理解してあげようと思いました。子ども1人に対してボランティアが1人つくのはいいなと思いました。一緒に楽しみながらアクティビティさせていただきました。
- ・ 子どもとボランティアの関わりが密になればなるほど、他の子との交流が生まれにくくなるので、できるだけ一人の子どもだけと話すのは避け、子ども同士の交流を深められればと思いました。

(3) キャンプ全体についての感想

- ・ 日本語があまり（ほとんど）理解できない子どもが、母語の補助で、不安そうな表情から笑顔に変わったのが印象的でした。
- ・ 子どもたちだけでなく、私たちもワンデイキャンプを楽しむことができました。「楽しかった？」と聞いて「うん」と言ってくれるとうれしかったし、私たちも初めて、やってよかったなと思うことができました。
- ・ 絵本を描くことや発表することを恥ずかしがっていた子どもも、大人の一言「上手だねー」で一步踏み出せるのを見られたことがうれしかったです。
- ・ 絵本をそれぞれが描くという内容がとてもよかったと思う。自分なりの作品ができ、自分の発想で物事が進んでいっているのが感じられた。
- ・ アイスブレイキングをしたことによって、自分も子どもと接しやすくなった。
- ・ ボランティアの自主性を尊重していただけた点、感謝しておりますし、良い経験をさせていただけました。
- ・ 初めは、子どもとどう関わっていこうかと戸惑いましたが、子どものようにはしゃいでいる院生とかを見て、すごいなとも思いました。それを見ていたら、自分もどんどん関わっていこうと思えました。初め緊張していた子も、最後にはニコニコして表情がやわらかくなって、それを見てホッとしました。

5-3. 本活動の成果と課題

ボランティアからのアンケート結果を見ると、本活動を企画する際に考えた、①子どもたちひとりひとりの個性を活かした活動にする②ボランティア全員が子どもたちに関われるようにする③言語に焦点が当てられるようにする、という目標をうまく達成できたことが分かる。また反省点としては、①年齢や言語能力などの配慮 ②子どもと大人の1対1の活動ではなく、子どもたち同士の関わり合いがあげられた。今後のワンデイキャンプにおいて、日本語力に関わりなくすべての子どもの中で「語りあい」「学びあい」が起こるような活動を企画していく必要があるだろう。

6. おわりにかえて—「わにっ子ワンデイキャンプ」の存在意義—

たった一日という限られた時間の中で、どのように子どもたちと関わり、活動の中からどのような学びを引き出すことができるのか。今回のワンデイキャンプのテーマは前回に引き続き「視点を変える」。行われた活動は、絵本の読み聞かせをし、その絵本のストーリーの続きを子どもたちが各々の視点から考え自分だけの絵本を作り、さらに他の子どもたちの作った絵本を見ることで他者の視点も共有しようという趣旨のもと立案・構成されたものである。今回で4回目となる「わにっ子ワンデイキャンプ」だが、物語を「読み聞かせ」して、その後椅子に座って、絵や文字そして文を紙に「書く」ということに集中させるという活動については、初の試みであった。実際に子どもたちは本活動にどう反応していったのか、また活動と一緒に参加してくれたボランティアと子どもたちの関係の変化はどうだったのか。以下、筆者の目から見た活動の様子について報告を行いたいと考える。

子どもの集中力は、大人が考えているよりもはるかに短い。興味がなければなおさらである。ましてや参加している子の半分は、日本以外の国にルーツを持つ子どもたちであり、日本語の絵本の読み聞かせに乗ってきてくれるだろうか。さらに今回は、椅子に座らせての活動であるため、学校と同じような活動をいやがったりはしないだろうか。そんな心配をよそに、実際の絵本をカラーで拡大コピーして作った大型絵本を使って読み聞かせを始めた時には、それまで部屋の中を走りまわっていた子どもたちもみんなおとなしく床に座って、ボランティアのお姉さんが読んでくれる絵本に聞き入っていた。そして物語が佳境に入ったところで、読み聞かせをストップし「さあ、この続きはどうなるんだろうねえ。みんなで続きを考えてみない？」と言って、子どもたち用に続きが書き込めるように用意した絵本を手渡すと、それぞれがおとなしく椅子について各々感じるままに続きの物語を作り始めたのである。子ども一人にボランティアが一人付くような形で、活動は進んでいく。座るなりいきなり書き始める子、「うーん」とうなりながら考えている子、うまくできなくて大声で叫んでいる子がいる中で、活動的な子どもの担当になったボランティアの男性2人は、最初その子どもをどう扱っていいかわからず苦戦していた。しかし、決してその子を否定することなくその子に寄り添い、対話をしスキップを図っていく中で、う

まくその子の意識を活動に集中させることに成功し、その子なりのユニークな物語を完成させることができたのである。他のテーブルにおいても、ボランティアが絵を誉め物語の独創性を誉めてあげることで、子どもたちの活動への意識が高まっていく様子が取れた。そして子どもたちは、もっとおもしろいものを作ろうと一生懸命になり、そんな子どもたちの姿を見て、ボランティアもさらに一生懸命に関わっていこうとする相乗効果により、さらなる関係の向上が図られ、それが活動の成功へと結びついていったのではないかと考えられる。自分の絵本が一足先に書き上がった子は、その物語をみんなに早く聞かせたくて待ちきれない様子だった。それぞれの絵本を発表するときには、発表するということが恥ずかしくて、「代わりに読んで」と言う子も中にはいたが、内容について質問をすると、自信を持って答えてくれる姿が印象的だった。

筆者がこの活動全般を通して感じたことは、この子どもたちの様子、反応の中に「わにっ子ワンデイキャンプ」の存在意義があるのではないかということである。今回の「読み聞かせ」や創作活動には、視点を変え、メタ言語能力を養うといった仕掛けが、確かに隠されてはいる。しかし、一日という限られた時間の中での活動という面では、その活動から得られる言語能力の向上には限りがある。もしその部分に重点を置くのであれば、何日か続けて活動を行わなければ意味を成さないであろう。それよりも、このワンデイキャンプという時間の中で子どもたちが手に入れようとしているのは、他者から認められることから起こる自分自身を大切にする気持ち、つまり自尊感情なのでないかと感じるのである。子どもたちの日常の生活において、肉親以外人間が自分一人と真剣に向き合ってくれて、自分のすることをすべて認めてくれるという経験をするのは希であろう。それは日本人児童も、外国にルーツを持つ子どもにとっても変わらないことである。そんな子どもたちが、自分を認めてくれる大人たちとともに遊び、学ぶこの「わにっ子ワンデイキャンプ」での経験は、彼らの自己概念形成においてプラスに働くのではないかと考えるのである。

キャンプの終わり頃には、ボランティアにしがみついて離れない子、飛び付いてもっと遊んで欲しいとせがむ子の姿があちこちで見られた。そして、保護者が迎えにくると子どもたちは、できあがった絵本を大事そうにかかえ、あるいは絵本を親に見せながら満面の笑顔で帰っていったのだ。筆者はこの子どもたちの笑顔に、「わにっ子ワンデイキャンプ」開催の意義を見いだすものである。

参考文献

- 秋田喜代美 (1998) 『読書の発達心理学—子どもの発達と読書環境—』 国土社
- 池上摩希子 (2002) 『「読むこと」と日本語指導』 縫部義憲編 『多文化共生時代の日本語教育 日本語の効果的な教え方・学び方』 瀝々社
- 岩立志津夫・小椋たみ子編 (2002) 『言語発達とその支援』 ミネルヴァ書房
- 国府田晶子 (2004) 「JSL 教育を必要とする児童を対象とした絵本使用学習の試み」 早稲

田大学大学院日本語教育研究科修士論文

松居直 (1973) 『絵本とは何か』 日本エディタースクール出版部

Krashen,S.(1993)*The Power of Reading:Insights from the Research,Libraries*

Unlimited. (長倉美恵子・黒澤浩・塚原博訳(1996)『読書はパワー』金の星社